鬼六

楠山正雄

青空文庫

一

ある村の真ん中に、大きな川が流れていました。その川は大へん流れが強くて速くて、昔から代々、村の人が何度橋をかけても、すぐ流されてしまいます。村の人たちも困りきって、都で名だかい大工の名人を呼んで来て、こんどこそけっして流れない、丈夫な橋をかけてもらうことにしました。

大工はせっかく見込まれて頼まれたので、うんといって引き受けてはみたものの、いよいよその場へ来てみて、さすがの名人も、あっといって驚きました。ひっきりなし、川の水はくるくる目の回るような速さで、渦をまいて、ふくれ上がり、ものすごい音を立ててわき返っていました。

「このおそろしい流れの上に、どうして橋がかけられよう。」

大工は、こう独り言をいいながら、ただあきれて途方にくれて、川の水をぼんやりながめていました。

すると、どこからか、

「どうした、名人、そこで何を考えている。」

という者がありました。

大工が驚いて、見まわすとたん、水の上にぶく、ぶく、ぶくと大きな泡が立ったと思うと、おそろしく大きな、鬼のような顔がそこにぽっかりあらわれました。

大工は、妙な、気味の悪いやつが出て来たと思いながら、わざとへいきで、

「うん、おれか。おれは頼まれたから、この川に橋をかけようと思って考えているのだ。」

といいました。

すると鬼は顔じゅう口にして、ぎえッ、ぎえッ、ぎえッと、さもおもしろそうに笑いました。そうして、大きな歯をむき出したまま、

「ふ、ふ、ふ、お前、いくら名人でも、大工にゃあこの橋はかからないぞ。」

といいました。

「じゃあ、だれならかかる。」

「そりゃあこのおれならかかるよ。」

「じゃあ頼む、お前さん後生だ、代わりにかけておくれ。」

「そりゃあかけてやってもいいが、何をお礼にくれる。」

「そりゃあかけてくれればなんでも上げるよ。」

「じゃあお前、その目玉をよこせ。」

「なに、目玉だ。」

大工もこれには少し驚きましたが、なにその時はその時でどうにかなるだろうと思って、

「よし、よし、お安い御用だ。」

といって、承知してしまいました。

二

大工はそれなりうちへ帰って、ゆっくり一寝入りして、あくる日また、何気なしに川へ出てみました。すると、川の水は一向引いていませんが、まさかと思っていた橋が、半分以上も、みごとにその上にかかっているので、びっくりしました。

「こりゃあじょうだんじゃあないぞ。」

大工は急にこわくなって、そっと両方の目をおさえました。

そこでその明くる日は、朝早くから起きて、また川へ出てみますと、まあどうでしょう、じつにりっぱな橋が、何丈という高さに、水が渦巻き逆巻き流れている大川の上に、もうすっかり出来上がって、びくともしずに、長々とかかっているではありませんか。大工はこんどこそほんとうに度肝を抜かれて、ただもう目ばかりきょろきょろさせていました。

すると、そのとたん、れいのどことも知れない川のそこから、

「おい、どうした、大工。さあ、目玉をよこせ。」

といいながら、鬼が出て来たので、「ひゃあ。」と一声、すっかり青くなって、ぶるぶるふるえ出してしまいました。

「ああ、ごめんなさい、すぐは困る。しばらくお待ち下さい。」

大工は泣くようにいって、あわててそこを逃げ出しました。

三

逃げ出したものの、どうする当てもないので、今にも鬼が追っかけて来るかとはらはらしながら、川の岸をはなれて山の方へどんどん逃げて行きました。

逃げ出して、山の中をあてもなくうろうろ歩いていますと、どこか遠くの林の中から、子供の歌う声がしました。やがてその声はだんだん近くなって、つい聞くともなしに、耳にはいってきたのは、こういう歌でした。

鬼六どうした、
橋かけた。
かけたらほうびに、
目玉、早もって来い。

この歌を聞いて、大工はほっとしました。そうして生き返ったように、元気をとりもどして、宿屋に帰って寝ました。

その明くる日、大工がまた川へ出ると、鬼はさっそく出て来て、

「さあ、すぐ、目玉をよこせ。」

といいました。

「まあしばらくお待ちください。どうもこの目をとられては、あしたから大工の商売ができません。かわいそうだとおぼしめして、何かほかのお礼でごかんべん願います。」

こう大工がいうと、鬼はおこって、

「何といういくじのないやつだ。じゃあためしにおれの名を当ててみろ。うまく言い当てたら、かんべんしてやらないものでもない。」

といいました。

そこで大工は、わざとまずでたらめに、

「大江山の酒顛童子。」

というと、鬼はあざ笑って、

「ちがう、ちがう。」

と首を振りました。そこでまたでたらめに、

「愛宕山の茨木童子。」

というと、鬼はよけいおもしろそうに、

「ちがう、ちがう。」

といって笑いました。

それから、まだいくつも、いくつも、でたらめな名をいって、鬼

がだんだん飽きて、こわい目玉をむいて、今にも飛びかかって来そうになったとき、大工はありったけの大きな声を張り上げて、

「鬼六。」

とどなりました。

「ちぇッ。山の神に教わったか。」

こういったとたん、ふっと鬼の姿は消えて無くなりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
　　1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年8月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼六

楠山正雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/